

Ⅱ-1 湯舟坂2号墳と 丹後地域の後期古墳

菱田 哲郎

1. はじめに

丹後国は和銅6年(713)4月に丹波国のうちの加佐、与佐(謝)、丹波、竹野、熊野の五郡を割いて設置された。丹後地域としてのまとまりが確認できるとともに、この段階でこれら5郡の存在が明らかとなる。なお、これら5郡のうち、丹波郡を除くといずれも評の段階の木簡が知られており、7世紀段階で成立していたことは疑いない。この領域を対象として律令制以前からの地域の編成をみていくことは十分に意義のあることと考える。本稿では、これまで進めてきた湯舟坂2号墳の成果を再検討するプロジェクトの一環として、律令制以前の地域社会について、律令制への接続を念頭に置きながら検討を進めることにしたい。

2. 丹後地域の群集墳

ひとくちに群集墳といっても時代によって異なる性格のものが存在する。丹後地域においては、横穴式石室を内包する古墳が密集する後期の群集墳のほかに、木棺を埋葬主体とする円墳で構成されるいわゆる初期群集墳が中期から後期前半にかけて存在するほか、弥生時代の墓制を引く尾根上に小古墳が展開する例も広く知られている。本稿においては律令制との接続を目的に検討を進めるため、横穴式石室を内包する例に限って群集墳としてみていくことにする。

これまでの丹後地域における群集墳の検討では、2009年におこなわれた京都府埋蔵文化財研究集会において舞鶴市域を除く丹後地域を検討した加藤晴彦氏の研究、同じ機会に提示された舞鶴市域についての松本達也氏の研究が重要な達成であるといえる(加藤2009、松本2009)。これらに依拠しながら、丹後地域の群集墳についてまず概観してみよう(図1)。

熊野郡域では湯舟坂2号墳が所在する久美浜町須田の伯耆谷川の流域に群集墳が展開する(図2)。暮石古墳群や九十九塚古墳群、オヤゲ古墳群など、いずれも湯舟坂2号墳よりも川上に小規模な横穴式石室墳が群集して築造されており、およそ30基の存在が確認されている。ここを含めて川上谷川の中上流域には比較的多くの横穴式石室墳が分布するが、群集墳として評価できるのはこの伯耆谷川奥部の古墳群のみであり、これらを伯耆谷古墳群と呼んでおくことにしたい。

竹野郡域では、大成・片山古墳群が群集墳として取り上げられ、総数21基を数える。一方で竹野川河口周辺では、大成・片山古墳群の対岸に高山古墳群が位置している。横穴式石室を内包する円墳は10基程度が確認でき、近くの上野古墳群も併せると20基を下らない群集墳といえる。これらを併せて竹野川河口域の群集墳として捉えておきたい。

与謝郡域では、入谷古墳群で30基あまり横穴式石室墳が確認されており、群集墳と評価できるが、その北に位置する石川谷の奥部にも高浪古墳群やヤンダC古墳群をはじめ横穴式石



図1 丹後の古墳時代後期群集墳とミヤケ地名



図2 伯耆谷の古墳群 (加藤 2009)

室を内包する円墳が点在しており、一つの古墳群として把握することが可能である。明石にある入谷古墳群との距離も近いので、明石・石川谷古墳群と呼んでおきたい。

加佐郡域では、大波・奥谷古墳群が典型的な群集墳として評価されてきた。現状では併せて80基近い横穴式石室墳が確認されており、丹後最大の群集墳と言って問題ない。大波・奥谷古墳群の北にあたる河辺の谷にも干田古墳群16基が存在する。加佐郡域には横穴式石室墳が点在する傾向がある中で、大波・奥原古墳群や干田古墳群は明確に群集する点で他のエリアの後期古墳と区別することができる。以上に述べてきた群集墳は、時期的にはTK43併行期、すなわち6世紀後葉から現れ、TK209にピークに達していると考えられる。

最後に、丹波郡域についてみておきたい。この地域には横穴式石室を内包する古墳は存在するものの、せいぜい3、4基にとどまっており、明確な群集墳を抽出することが難しい。一方で、横穴墓が集中して展開することが知られている(中村2018)。とりわけ旧大宮町周枳の周辺に多く分布しており、太田鼻横穴墓群20基に左坂横穴墓群、里ヶ谷横穴墓群などを合わせると優に50基を凌駕する。時期的には、7世紀に入ってから造墓であり、8世紀前半まで営まれる点で、上述してきた群集墳にはやや遅れて展開している。こうした終末の時期に違いはあるものの、7世紀前半についてみると両者はともに盛んに造られていると言えるので、群集墳に代わるものとしてこれら横穴墓群を捉えることが許されよう。

以上のように、丹後の諸地域では各郡に1カ所の群集墳が知られ、加藤氏が「1郡1群集墳に集約されたことが看取される」としたことは首肯されよう。時期的にも6世紀後葉から7世紀前半にピークがあり、評制が施行される直前の地域社会の状況を語っていると同時に、評の領域がそれ以前の地域区分を反映していると言えそうである。

3. 群集墳の分布と開発拠点

群集墳の意義については多くの研究史があり、家父長家族の自立であったり、個別経営の進展といった社会の変化の反映とみる学説が広く浸透している⁽¹⁾。こうした社会進化論的な見方とは別に、地域の開発の進展や屯倉の形成と関連付ける見方も提示されてきている(丸山1975、堀江1983)。

筆者も播磨国多可郡西部の事例をもとに、妙見山麓に営まれる200基を超える群集墳の背景として、7世紀に入って激増する集落遺跡との関係から、地域の開発の進展と結びつけ、その拠点としてミヤケがあったことを木簡に記された「三宅」の地名から推測した(菱田2013)。この地域では、郡名寺院の多可寺が7世紀半ばに成立し、それに隣接する思い出遺跡において官衙の一角と考えられる同時期の建物、井戸が見つかることから、7世紀半ばに郡(評)の中心域となっていることは疑いなく、それに先行する地域拠点がミヤケと呼ばれていたと推測している。ミヤケの性格については史料からは判然としない点も多いが、開発の拠点という役割があったとみてよく、多可郡の場合、付随して7世紀前半における須恵器窯の成立なども同じ脈絡で捉えることができる。開発にともなう人口増は移民によったと考えられ、『播磨国風土記』託賀郡条にある明石郡大海里からの移住の記事がその一端を物語っている。もともと土地に根ざさない新来の人々の墓として、大規模な群集墳形成の意義があると考えている。

文献記録に登場する屯倉についても群集墳との相関をとることが可能であり、たとえば三島の竹村屯倉と塚原古墳群が典型的と言える。また、八尾市の高安千塚についても、同地が高安郡三宅郷であったことから、もともと屯倉があったと考えられ、大規模な群集墳の形成とミヤケの活動との関係がうかがわれる。

このような視点から上述した丹後地域の群集墳について検討してみよう(図1)。まず丹後地域でミヤケに関わる例として、加佐郡の三宅神社が挙げられる。『延喜式』神名帳に登場する式内社であるが、現在の三宅神社はもともとは荒神であったのが北吸神社を経て1882年に式内三宅神社と称するようになった。地名が三宅谷であることがその根拠である。一方、三宅神社の論社になるのが舞鶴市河辺中にある八幡神社で、旧称を三宅八幡といい、かつ江戸時代に編まれた『丹後風土記』に「河辺坐三宅社」の記述があり、この周辺に三宅郷も比定できるからである(長濱ほか1927)。この論争は容易には決着が付かなかったようであるが、河辺のあたりが三宅郷であった可能性は十分にみとめられる。大波・草谷古墳群が位置する山塊の北側は、河辺の谷であり、この古墳群がミヤケに関連する可能性は高いといえる。

地名からミヤケとの関連がうかがえるのは竹野川河口の古墳群であり、旧竹野郡に三宅村が存在し、少なくとも江戸初期までは遡ることが知られている。高山古墳群や上野古墳群が至近であるが、上述した大成・片山古墳群の背景としても考えることができる。とくに大成古墳群のように近くに可耕地がない海に突き出した半島上に位置する古墳群は、生活の拠点から離れた場所に葬地としてわざわざ設けられたと考えられ、島根県益田市の鶴の鼻古墳群などと立地が共通する。海浜の労働や海運との関係も考えられ、ミヤケが担った多様な生産と関係すると想像される。

与謝郡域の群集墳として石川谷周辺については、直接にミヤケとの関係を論じられる施設や地名はない。ただし、ここに物部神社が所在することは重要な意義がみとめられる。石川谷からはやや北に位置しているが、石川村を氏子圏としており、石川谷と密接な関係をもっていることがわかる。また、この地は『和名抄』に与謝郡物部郷に比定され、石川谷がその郷域であったと推測でき、当地と物部との関係は深い。物部と屯倉との関係もまた深く、物部氏の配下の新家氏が管掌した伊勢の新家屯倉(『日本書紀』宣化天皇元年五月辛丑条)の比定地には物部神社が所在している。蘇我氏が管掌する屯倉に曾我部が置かれたように、物部の奉仕拠点にミヤケが設置されていた可能性が導かれる。

熊野郡域の伯耆谷古墳群については、湯舟坂2号墳の被葬者をめぐる議論において、同郡に関わる大私部の存在、あるいは熊野評私里の存在が注目されている(本庄2023)ことが参考になる。私部は敏達天皇の時代にその皇后のために設けられた部民であり、皇后炊屋姫の母方、蘇我氏の影響が強い部民と考えられている。屯倉の経営と蘇我氏との関係からも、私部の拠点としての屯倉が設置された可能性が高い。その一つとして交野市私部の私部遺跡が挙げられ、6世紀代の掘立柱建物群が発見され、屯倉に関わる遺跡と推測されている(網2005)。こうした点からも、伯耆谷古墳群の背景として熊野郡私里にあったと推測されるミヤケを想定することができよう。

最後に丹波郡の横穴墓群についても背景を考えておきたい。横穴墓がとりわけ集中するのが、旧大宮町の周枳の周辺である。この地には式内社の名神大社である大宮売神社が所在する。こ

の大宮壳神は宮中で祀られる神であり、また造酒司の主要な神でもある。こうした宮中との関係からも、この地が王権とつながりを古くからもっていたことがうかがえる（菱田 2024）。太田鼻 28 号横穴墓からは「厨人」と記された 8 世紀前半の墨書土器が出土しているのも、貢納に関わる施設の可能性が考えられる。こうした関係を横穴墓の盛期である 7 世紀前半に遡らせることは可能ではないかと考える。

丹後地域の各郡ごとに群集墳の所在とその背景について検討を進めてきた。ミヤケについては実態が不明瞭であり、その存在がうかがえたとしても、その役割については明らかになったとはいえない。しかし、地域の開発の拠点というだけでなく、当地の部民たちの王権への奉仕の拠点という性格は導くことが可能であり、こうした王権による地方支配の実態を群集墳が表していると考えられることができる。

4. 丹後地域における大型横穴式石室の分布

後期古墳を特徴付ける様相の一つとして、大型横穴式石室の構築がある。同じ横穴式石室であっても規模による階層差が明示されるようになり、地域社会の階層構造を示す重要な要素となっている。家族墓としての横穴式石室の特性から、家ごとの階層差は地域においては氏姓制度であらわされる身分表象と密接に関わっていると考えられる。こうした点から、最有力者の墓である大型横穴式石室の分布は、地域における紳士録のような役割を果たしていると考えられ、これをもとに地域社会の構成をみていくことが可能になる。大型横穴式石室をどのように規定するかという点が問題となるが、各地の実態に即して考えると、玄室長 5 m、もしくは全長 10 m、玄室幅 2 m が大型横穴式石室の基準とすることが実際的である⁽²⁾。これに当てはまる古墳を丹後において抽出して論じることしよう。

まず、全体を概観してわかるのは、各郡にまんべんなく大型横穴式石室をもつ古墳が分布している点である（図 3、表 1）。最上位の古墳もほぼ同じ程度であり、石室規模の階層性からは、丹後全体で傑出する存在はみとめにくく、各郡に数カ所づつ最上位の古墳が存在する状況が把握できる。のちに郡領層となる勢力が、こうした大型横穴式石室の分布から読み取れるとみてよいだろう。丹後地域では評家、郡家の遺跡の捕捉が不十分なため、この大型横穴式石室と律令制下の郡里との対応は検討しづらいが、今後の課題となる。

次に、大型横穴式石室の分布について見てみると、上述した群集墳の中、もしくは近接して存在することが挙げられる。大波古墳群中の大波 7 号墳、竹野川河口域の群集墳では高山 3 号墳や 12 号墳、あるいは片山 1 号墳がある。伯耆谷古墳群では須田平野古墳や湯舟坂 2 号墳が知られており、伯耆谷古墳群の群集墳はこれらの古墳の谷奥に位置している。石川谷や入谷の群集墳では明石に河ノ辺 1 号墳や滝谷 1 号墳があり、入谷 15 号墳の玄室幅も 2.0 m あり、大型横穴式石室に準じる存在といえる。一方、横穴墓の群集する大宮町周積の周辺では大型横穴式石室をもつ古墳はないものの、竹野川の対岸に新戸 1 号墳が存在しており、横穴墓の築造前の有力者の墓として評価できる。

以上で述べてきたような、群集墳との関係が密な大型横穴式石室墳については、群集墳の被葬者を率いる役割をもつ被葬者像を描くことが可能である。文献史の成果をふまえると、ちょうど部民と伴造のような関係と理解してもよいだろう。先に想定したミヤケもこうした人々の

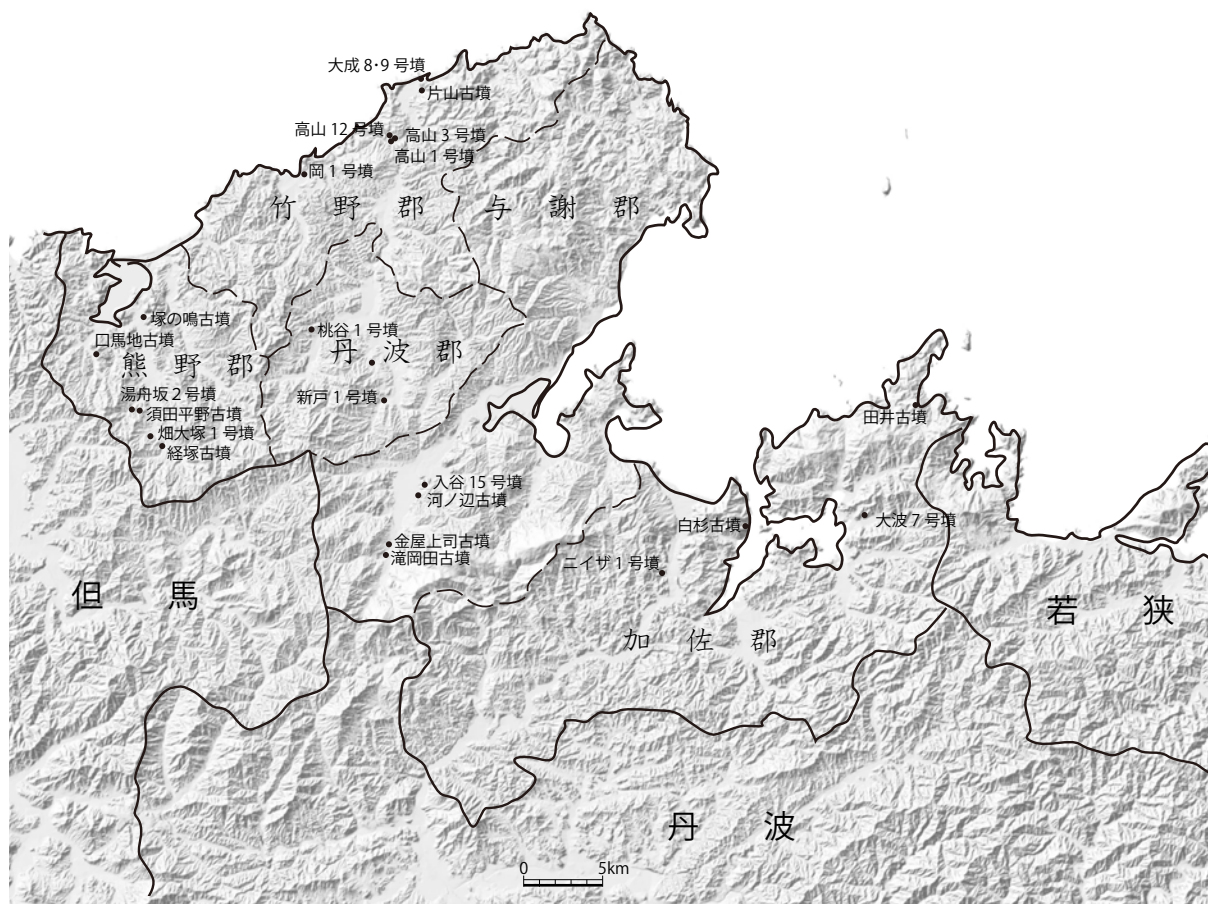


図3 丹後の大型横穴式石室の分布

表1 丹後地域の大型横穴式石室

旧郡	名称	所在地	石室全長	玄室長	玄室幅	形式
熊野	口馬地古墳	京丹後市久美浜町		6.4	2.0	両袖
	塚の鳴古墳	京丹後市久美浜町甲山	(7.0)	4.8	2.7	両袖
	須田平野古墳	京丹後市久美浜町須田	(8.5)	4.4	2.1	両袖
	湯舟坂2号墳	京丹後市久美浜町須田	10.6	5.7	2.4	両袖
	畑大塚1号墳	京丹後市久美浜町畑		5.5	1.7	両袖
	経塚古墳	京丹後市久美浜町布袋野		5.1	2.3	
竹野	大成7号墳	京丹後市丹後町竹野	10.2	4.4	1.9	右片袖
	大成8号墳	京丹後市丹後町竹野	8.7	4.5	2.5	両袖
	片山1号墳	京丹後市丹後町竹野		6.2	2.0	右片袖
	高山3号墳	京丹後市丹後町徳光	10.2	5.9	1.5	右片袖
	高山12号墳	京丹後市丹後町徳光	12.1	5.7	2.2	右片袖
	岡1号墳	京丹後市網野町小浜	10.8	6.6	2.3	無袖
丹波	桃谷1号墳	京丹後市峰山町新治	9.5	4.5	2.1	両袖
	新戸1古墳	京丹後市大宮町奥大野	(7.2)	6.0	2.1	両袖
	三本松1号墳	京丹後市大宮町善正寺	9.9	4.5	1.6	右片袖
与謝	入谷15号墳	与謝野町明石	(9.4)	—	2.0	
	河ノ辺古墳	与謝野町明石	(6.6)	4.4	2.2	右片袖
	滝谷1号墳	与謝野町明石	8.2	5.1	2.0	右片袖
	金屋上司古墳	与謝野町金屋	7.9	4.9	2.3	無袖
	滝岡田古墳	与謝野町滝	9.8	4.1	2.3	右片袖
加佐	田井古墳	舞鶴市田井	10.0	4.2	2.0	
	大波7号墳	舞鶴市大波下	9.4	6.1	1.5	無袖
	白杉古墳	舞鶴市白杉	8.6	4.4	2.4	両袖
	ニイザ1号墳	舞鶴市和江	11.0	5.3	2.2	両袖

単位:m ※()は残存長

奉仕の拠点という性格をもつのであろう。

一方で、上述したような群集墳との関係が希薄な大型横穴式石室も各郡に分布している。峰山町の桃谷古墳、与謝野町加悦の金屋上司古墳、滝岡田古墳、あるいは舞鶴地域のニイザ古墳などが該当する。これらについては、別の観点、すなわち水陸の交通路との関係が大きいと判断できる。

終末期の大型横穴式石室墳と交通路の関係は、山陽道を中心に広瀬和雄氏が指摘しており(広瀬 2013)、実際、のちの官道に沿うように大型横穴式石室が立地することが明らかになっている(菱田 2020)。出雲地域の事例では、より密接に山陰道と後期の首長墳が関わることで知られており(池淵 2018)、古代官道のルートが古墳時代後期に遡ることが予測されている。こうした観点から丹後地域の大型横穴式石室を捉え直すことが必要である。

5. 交通路と地域の編成

丹後の交通路としてまず取り上げられるのが山陰道の丹後支路である。もちろん丹後分国後に設けられた官道であるが、以前からあるルートを踏襲した可能性がある。この支路は与謝峠を越えて丹後に入り加悦谷から阿蘇海に至ると考えられている。このルートとの関係で注目されるのが金屋上司古墳である。隣接して「滝大道」の小字があり⁽³⁾、この官道のルートに沿って位置していることが推測できる。近くにある滝岡田古墳も同じ意義をもつと考えられ、より交通路と密接に古墳が築造されていると評価できる。

丹後における交通路を考えるうえで参考になるのが、『丹後国風土記』の逸文にある天羽衣の説話である。降り立った天女のうち残された一人が老夫婦のもとから逃げていく道行きの話から、比治→哭木(内記)→奈具のルートが表れている(菱田 2024)。奈具より先には竹野川河口域に至り、また比治から比治峠を超えると熊野郡に至る。このことからこのルートは熊野郡から丹波郡を経て竹野郡に至るルートであり、おそらくは郡家をつなぐ伝路であったであろう。先にそれぞれの郡にミヤケの存在を推測したが、それらをつなぐ道として想定することも可能と考える。また、峰山町新治の桃谷古墳もこのルートと関係する古墳と考えられる。

丹波郡から与謝郡へは、竹野川流域から低い峠を経て福田川流域に至る今日の鉄道のルートが合理的であり、このルートに沿って多くの遺跡が存在する。先に挙げた新戸1号墳もこの交通路に面する古墳として評価ができよう。さらに与謝郡と加佐郡間の交通としては、石川谷から南に入る香河谷が有力視でき、大宮峠を越え、さらに普光峠へと至るルートは近世の幹線であった。この香河谷には石室の規模は不明ながら墳丘の直径20mを超す陣取1号墳があり、このルートが古墳時代後期に遡ることを示唆している。

国境を越えるルートとして丹後但馬をつなぐ交通路も検討が必要である。久美浜町から豊岡市を結ぶルートとしては現代では河梨峠の国道178号線が一般的であるが、古墳の分布を勘察すると、川上谷の最奥部から豊岡市奥野に抜けるルートも重視できる。さらに、湯舟坂2号墳が位置する伯耆谷を遡上し、峠を越えて奥野に至る大坂越えのルートも古くから使われており、分岐点に置かれていた道標(図4)には「右をくの」と記されている。天保国絵図では、この道が描かれ「大坂峠」の文字も記されている。この「おおさか」という地名について、「みさか」とともに律令制以前の主要な交通路でしばしば登場することが鈴木景二氏によって



図4 須田区にある奥野への道標

指摘されており（鈴木 2000）⁽⁴⁾、この伯耆谷の奥の大坂も同様の事例に加えることが可能である。久美浜町須田から大坂を越えると奥野に至るが、その先に豊岡市三宅があることも重要である。なお、豊岡市奥野には大型横穴式石室をもつ塚ノ本古墳が存在している。上述したように伯耆谷古墳群の背景にミヤケの存在を考えたが、この大坂越の道はミヤケをつなぐ道であったといえよう。九州北部において史料に現れる屯倉が豊前地域から那津に至る交通路沿いに並ぶことが指摘されている（西垣ほか 2018）ことをふまえると、上述してきた丹後の古墳時代後期の交通路がミヤケをつなぐ道であったとみてよいだろう。

大型横穴式石室をもつ古墳が交通路に面して立地することの意義として、地方豪族がもっている交通への供給機能を考えることができる。「驛馬」の語が『日本書紀』欽明天皇三十二年四月壬辰条に、「驛使」の語が『日本書紀』崇峻天皇五年十一月丁未条に表れており、はいま、すなわち馬を乗り継いで情報を伝達することが6世紀後半にはおこなわれていたと推測できる。こうした馬の乗り継ぎは律令制下では駅家や郡家でおこなわれるようになるが、その原型がすでに6世紀後半には成立するとみておきたい。ところで、丹後支路には匂金駅という駅家が置かれていたと推測されるが、いずれの比定においても加悦谷の中に存在していたとされている。本稿でみた大型横穴式石室が立地する与謝野町明石や金屋・滝がその候補地として考えることができ、交通への供給機能が時を越えて継承されるといえそうである。

なお、加佐郡内の大型横穴式石室では、田井古墳や白杉古墳など海に面して単独で存在するものがあり、海上交通との関係で注意される。和江のニイザ1号墳も由良川の水運との関係を考える必要がある。このほか、網野町の岡1号墳も日本海に面する位置にあり、陸路に加えて海路もまた交通への供給の対象となり得たのであろう。

6. おわりに

丹後地域の群集墳と大型横穴式石室について検討を加えてきた。これらの盛行する6世紀後葉から7世紀前半はまさに律令制形成前の揺籃期といえるが、その段階に地方支配の骨組みが確立しつつあるとみてよいだろう。丹後5郡という地域社会の原型もまた、群集墳や横穴墓の分布から読み取ることが可能である。7世紀代の遺跡との接続を図りながら、丹後の地域社会の推移をみていくことが必要となるが、こうした取組もまたすでに始まっている（清原 2024）。こうした地域社会の編成をみていくうえで、丹後地域はきわめて有効なフィールドといえる。

註

- (1) 群集墳の学史については、森岡秀人氏による総括が便利である（森岡 1988）。
- (2) 兵庫県多可町に所在する東山古墳群の造墓原理を分析した結果、盟主墳と従属墳が三世代にわたって築

かれることが判明したが、ここでは全長 10 m、玄室長 5.0 m、玄室幅 2.0 mが両者を分ける値であった（菱田 2002）。

- (3) 加藤晴彦氏のご教示による。『加悦町史』資料編第 1 巻に所収の「金屋村地引絵図」（年代未詳、金屋区蔵）に「瀧大道」の記載がある。なお、当地域の「大道」地名は（竹岡 1978）にとり上げられている。
- (4) この問題については吉川真司氏からご教示を得た。

参考文献

- 網伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』533号
- 池淵俊一 2018 「プレ出雲国の成立—東西出雲の統合—」『古墳は語る 古代出雲誕生』島根県立古代出雲歴史博物館
- 加藤晴彦 2009 「丹後半島における群集した墳墓・古墳について」『京都府の群集墳』京都府埋蔵文化財研究会
- 加悦町史編纂委員会 2007 『加悦町史』資料編第 1 巻 与謝野町役場
- 清原啓護 2024 「丹後半島の 7 世紀」『京都府の 7 世紀』京都府埋蔵文化財研究会
- 鈴木景二 2000 「古代の飛騨越中間交通路—飛騨の大坂峠」『富山史談』132号
- 竹岡林 1978 「丹後国」『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂
- 長濱宇平ほか（編）1927 『丹後史料叢書』第一輯 同刊行会
- 中村彰伸 2018 「丹後地域における横穴墓の立地とその階層性」『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』（京都府立大学文化遺産叢書 第 14 集）
- 西垣彰博・坂上康俊 2018 「阿恵遺跡の歴史的特質」『阿恵遺跡』粕屋町教育委員会
- 菱田哲郎 2002 「横穴式石室の造墓原理—東山古墳群と坂本古墳群を中心に—」『横穴式石室からみた播磨』第 2 回播磨考古学研究集会実行委員会
- 菱田哲郎 2013 「7 世紀における地域社会の変動—古墳研究と集落研究の接続をめざして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』178 集
- 菱田哲郎 2020 「大型横穴式石室と交通」『横穴式石室の研究』同成社
- 菱田哲郎 2024 「祭祀遺跡から神社へ—古代丹後の信仰を遺跡から考える—」『京都を学ぶ【丹後編】』ナカニシヤ出版
- 広瀬和雄 2013 「終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 集
- 堀江門也 1983 「河内における大型群集墳論展望」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』同書刊行会
- 本庄総子 2023 「丹後王国論の現在」『地域資源としての湯舟坂 2 号墳Ⅲ—湯舟坂 2 号墳の被葬者像を探る—』京都府立大学文学部考古学研究室
- 松本達也 2009 「舞鶴市域の群集墳」『京都府の群集墳』京都府埋蔵文化財研究会
- 丸山竜平 1975 「河内の開発における二つの画期」『日本史論叢』5 輯 日本史論叢会
- 森岡秀人 1988 「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』吉川弘文館

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2